

二十日明治會館に開かれたる演説會は、當初罷業應援の意味なりしも、事件解決したるを以て、經過の報告を兼ねて江湖の批判を仰がんとせるなり。當夜麻生氏は足尾に、棚橋氏は信州にあり、鈴木會長は所用不參せしを以て、加藤勘十、坂口義治兩氏之を主宰して開會したるに、忽ち野次の蜂起を見、混亂の状を呈するに到れり。當日の野次は巢鴨なる「労働社」系統にして、其素性次の如くなるが、茲に注視すべきは、當夜の聴衆が辯士の所論、即ち足尾事件の解決事情を聴かむとせず、却て野次に興味を感じるが如き態度を表せしことなり。「労働社」系統其他之に近似する一派が指導者として加藤氏、或は赤松氏の演説に反抗すべしとは豫て期せられたる事なるが、足尾より上京せし辯士に對して尙攻撃を行はば聴衆は彼等社會主義の徒を容赦すまじとの豫想をも全く裏切られ、聴衆中にも亦、足尾の労働者が足尾鑛業所を破壊することを私かに期待せるが如き態度あるを窺はしめたり。其日の明治會館に表はれたる空氣は、是等聴衆の——延いては東京市民の——所見を窺い得たる以外、労働組合の進路に重要な轉機を與へたり。そは昨秋社會主義同盟の成立以後、同一のトラックを走らんとする不自然なる状態に置かれし社會主義運動と労働組合運動とが、右と左に袂を分つべくして而も分るゝ機會なかりし状態に對し、必然の機會を與へたることなり。冗々しけれども左に是を説かん。

△社會主義者の麻生氏に對する批難

社會主義同盟及之と主義を等しうする左翼組合（正進會、信友會、時計工組合等の如き）の表せる最近の著しき傾向は成敗利鈍を問はずたゞ革命的暴動を起さんことを目的とし、且労働者以外の階級即ち智識階級出身の労働運動者を排斥するに維日も足らざること之れなり。彼等が智識階級出身の指導者を排斥せんとするは、内實に於ては主として個人的感情に基くものなれども其表面の言説を聽けば或點は労働運動者のため必ずしも捨つべからずとさる。知識階級を排斥するは、労働の體驗なきため、労働者との間にびつたりと心絃一致せざるものあると、不知／＼の間に指導者としての職業心理を醸成し、資本家に對する闘争が組合の盛衰を基調として考へられ「負けても勝つても打衝かれ、資本家は敵だ！」と云ふ心が憶するとなす事あり。而して其論者は「負けても勝つても打衝かれ」と云ふ感情こそ虚げられたる者の本然性にして又社會進化の原動力をなすものなりとなせるなり。

參 考 (五月一日發行、労働運動の論説)

指 導 者 論 (原文のまゝ)

(一)